

「スロー・デザイン研究会」の活動を始めて四年が経ちます。スロー・デザインとは、小さなものの、つましいもの、失われたもの。そしてゆっくりと持続し循環するものの意味を見直し、「住む技術」を取り戻すためのデザインのことです。遠大な時間の中で蓄えられた住の心や地域の技術は、ますます加速する経済効率優先の流れの中でいつ消えてもおかしくない状況です。しかし近年、全国各地でモノづくりを通して、人と人、人と地域がつながり直していくスロー・デザインの運動が始まっています。住をめぐる新たな物語が、すでに始まっているんですね。



ヨシ外壁ヒラ内壁の住宅兼カフェ（2013年完成）。滋賀県

スロー・ハウスの暮らし

●2008

……住まいとの関係が変わった

本来、家とは家族が長い時間をかけ、地域から多くのものを学びながら自分たちでゆっくりかたちづくりいく場だった。そして、家を修繕したり長持ちさせたりするのに必要な「住む技術」や儀礼の作法を代々受け継ぎ、学んでいく場でもあった。住が、衣・食とならぶ文化の柱といわれるのはこのためである。

だが、今では住宅はお金を出して買うものといった感覚があたりまえになつて、計画、着工から完成、修繕まですべて専門家任せ。家を建てたい人は専門家にイメージを伝え、お金さえ払えば住宅という商品を手に入れる事ができる。その結果、簡単な修理ひとつできない父親、インテリアばかり気にする母親、家に愛着をもてない子どもたちのいる、そんな家庭が増えてしまった。

住まいとはもともとその土地の気候風土で育った材料と、地域に蓄積された豊かな知恵と技術によつてつくるもの。だが、今や住宅をつくるのに必要なものの大部分が工場で大量生産され、建てたい人がいれば日本中どこにだって運んでいける。ちょうどコンビニで売っているファーストフードのように、地

域とは何の関係もない単なる消費財になつてゐる。しかもより速く、より多く住宅をつくるための生産システムが最優先され、悪い化学物質を含む建材が市場に出回ることにもなつた。

シックハウス、アスベスト禍、耐震強度偽装事件。近年、住宅やマンションを中心にメディアをにぎわせてきた一連の人災の背後には、住宅市場をめぐつて飽くなき競争をくり広げる効率優先のまなざしがある。それは、住宅を、もはや命を守り育てるための場としてではなく、人間をモノとみなし収納するための、単なる容器としてみるまなざしだ。

最近、日本でもエコ村（エコ・ヴィレッジ）をつくつて住もうという動きが目立つ。エコ村とは、ゆとりを失い、大量消費と大量廃棄を繰り返す環境破壊型のファストな自分たちの生き方を見直し、自然との共生、食とエネルギーの自給を視野にいれた、真に豊かな暮らしを取り戻すためのスローライフなコミュニティのことだ。

エコ村につくる住宅はスローハウス。一言でいうと、地球環境に大きな負荷をかけず、心豊かな暮らしと血の通うつながりを取り戻すこと。

「スローハウスをつくる」ということは、人と人、人と地域、人と自然がもう一度つながるような家をつくつてみようということだ。つまり、家づくりを通して失われつつある住む文化を再生しようとすることだ。

これから紹介するのは、エコ村の住まいと暮らしに多くの示唆を与えてくれるにちがいない二つのスローハウスの例である。

……わらの家

二〇〇〇年からぼくはストローベイルと呼ばれる圧縮したわらのブロックを使つたストローベイル・ハウス、通称「わらの家」の研究を始め、国内での普及に取り組んでいる。日本では古くから稻わらが住まいの建材に利用されてきた。屋根葺材や畳、わら縄、壁土に混ぜるワラスサから注連縄に代表される祭具まで、わらぬきで日本の住文化は語れないほどだ。だが高度成長期を境に日本人の生活環境が一変し、わらと住まいを結びつけて考える人も少なくなつた。

日本人はお米が主食だ。毎年秋には稲刈りをする。使い道がなくて余つたわらは田んぼや畑に戻され、やがて腐つていい土になる。そしてその土が作物を豊かに実らせ、私たちの命を支えてくれる。

大地から生まれ大地に還る、命をゆるやかに循環させるすぐれた素材であるわらで、ぼくは家をつくろ。それは、古来より延々と続いてきた日本人とわらの物語に代わる、新しいわらの物語をつくることだ。

厚さ四〇センチもあるわらブロックの上から土を塗つた壁。ストローベイル・ハウスは、この厚い壁のために高度な断熱性と吸湿性、蓄熱性、遮音性をもつてゐる。有害な化学物質とも無縁な低エネルギー、環境循環型の建築だ。

ぼくが設計した三軒の住宅では、冬は部屋の奥まで射しこんだ昼間の太陽の熱が蓄熱され、日が沈んだ後もしばらくは薪ストーブを焚く必要がないくらいあたたかい。また、夏の暑さを避けようと室内に入つたときのひんやりした感じは、まるで古い茅葺農家の中にでもいるようだ。

おまけに壁の土が、室内の乾燥の度合に応じて湿気を吸い取つたり、逆に吐き出したりして調節もしてくれる。冬暖かく夏涼しい、エアコンも除湿機もいらないストローベイル・ハウスは、いわば壁全体が呼吸をしている温熱調節装置なのだ。

でもこの建築のいいところは、ただ健康や環境に優しいことばかりじゃない。今の住宅が忘れてきたいろいろなものを思い出させ、再生させる建築なのである。

……人と人、人と地域をつなぐ家

ストローベイル・ハウスはアメリカで生まれた建築様式だ。だがぼくがめざすわらの家は、ただよその国の中をすることではない。日本の田んぼのわらと日本の森の木を組み合わせ、もともとその土地にあった素材やすぐれた伝統的な知恵と技術を生かし、日本の風土に合ったわらの家をつくることだ。ぼくがこれまで設計したわらの家では、わらブロックを木造部に固定するのに、伝統的な土蔵造りからヒントをもらつた下げ縄でしばる方法と、細い竹を格子に組んで固定する方法を採用している。屋根裏と床下には虫除け効果と断熱効果を期待して、いぶしたモミガラを詰めたものもある。ペンキを使わず、杉板を一枚一枚バーナーでまつ黒に焼いて壁に張つたり、土と砂利をたたいて玄関の土間にもした。どれも高度経済成長のさ中に忘れられていつた懐かしい素材と技術。健康にも環境にもいいものばかりだ。地域の職人たちの記憶の中には、豊かでエコロジカルな知恵とすぐれた技術がまだまだしつかり生きていく。

わらの家では建て主が率先し、地元の職人、友人や素人のボランティアの人たちも協力して、わらを積んで固定し、土を塗る。さまざま意識をもつて集まってきた人たちといつしょに、建て主みずから汗を流し家づくりに関わることは、家と住み手の関係を見直し、家族がつながり直し、家への愛着を育てる上で大きな意味があるからだ。

これまでに設計したわらの家でワークショッピングを企画しインターネットで募集したら、どれも大勢の人たちが参加してくれた。手弁当で参加する彼らの思いはさまざまだ。今の住宅や環境に疑問や不安を感じている人、家づくりの喜びを体験したい人、将来のエコ村づくりをにらんでわらの家のつくり方を勉強しに来る人、わらや土を何となくさわってみたい人。

初め緊張していた人も、わらにまみれ、子ど



ストローベイルの土壁に“宝物”をはめ込んで遊ぶ

ものように土いじりに熱中し、その喜びをいろんな人と分かち合ううちに、自然と肩の力もぬけて本来の自分を取り戻していく。昔はどこの村にも結^{むす}という組織があつて、おたがいに労力を提供し合い助け合つて家の新築や改修をしたものだが、わらの家のワークショップは、さながらインターネットの時代における結の復活を見るようだ。

わらの家は、専門家たちだけの聖域だった工事現場を人が集う広場に変える。一度でも参加した人たちの住まいに対する考え方は今後きっと変わるはず。建て主とその家族の、家への愛着も大きくふくらんでいくにちがいない。わらの家は、だれもが忘れかけている懐かしいものや嬉しいこと、環境にいいものを取り戻しながら、人と人、人と地域をつなぐスローハウスなのである。

……ツリーハウスの試みから

正面に中央アルプスを望む雄大な西斜面の中腹。赤松と栗の木の混じる竹林の中に、一瞬木の上の鳥の巣と見まがうような小屋が見える。長野県K市に暮らすアメリカ生まれの環境エンジニア、ダグラス・フナーが自力で建てたツリーハウスだ。

一九六〇年代末、アメリカ西海岸を中心に起こった環境運動の中心的存在だったダグラスが来日したのは一九八〇年。その十年後にはオゾンシステムによる空気・水質浄化装置と風力発電、太陽光発電装置等の開発と販売を行う会社を設立した。一九九三年になるとランドサットのデータをもとに作られたソーラーチャートから、年間日照時間ベスト五に入る長野県のこの山麓を割り出して移り住み、最先端

のテクノロジーを活かしたツリーハウスを建てたのである。

ダグラスによると、移ってきた当初この土地はそれこそ手のつけようのない「ジャングル」だった。彼の拠点づくりは気の遠くなるような「土地のリフォーム」から始まる。土地を耕し、ジャガイモやライ麦、ニンジンを育てる。もちろん無農薬だ。

ダグラスは、この菜園の一画を軽くひとまたぎできそうな背の低い竹垣で仕切り、そのまん中にかがまないと入れないような小さな鳥居をつくつた。鳥居の向こうには「ネイチャーランド」と彼が呼ぶ、雑草が伸び放題の手つかずの自然が保存されている。そこはダグラスにとってもつとも大切な聖地のひとつ。土地の開墾という人間の「身勝手」と、もともとの自然に対する畏敬の念を忘れないための、彼自身の儀礼的表現なのだ。

工事が始まると、ダグラスは重機を使い、材木などの建築資材を吊り上げて運び込む。建設場所は車を停められる山道の目と鼻の先。おまけに足場もいい。しかも余分なエネルギーを使うことには人一倍うるさいはずのダグラス。そんな彼があえて材木の搬入を人力に頼らなかつた理由は、地表に芽を出すたくさんのがんばつた。

生態系とは、そこに生きる動物や鳥、昆虫から名もなき小さな野草にいたるまでの、多様な命のつながりのこと。しかもそこには彼らが生きるために必要な、その場所固有の太陽の光と空気、水と土、風、風景がある。

命をめぐるこの多様なつながりの輪の中に、人間も一構成員となつて加わり、共に生きる。ある場所